

倉吉往来の整備

慶長八年（一六〇三）、初代津山藩主森忠政は、美作国の入国と同時に津山城の築城と城下町の整備、城内の検地と共に街道の整備に着手します。

鏡野町域を通る主な街道は、津山城下町から伯耆国（鳥取県）倉吉を結ぶ倉吉往来（伯耆往来・倉吉街道）でしたが、現在の国道一七九号とは



新町宿場町の古写真

大きく違います。

当時の倉吉往来のルートは、津山城の大手、京橋口を起点にし、椿高下の八子坂から総社宮前を通過して北上し、一宮から西田辺を経て、有木札を越えて香々美中村（香々美）へ至ります。香々美中村からは、香々美川を北上する形で藤屋・寺和田・百谷を通過し、百札を越えて養野へたどり着きます。そして上養野から北上して福見に至り、福見から奥津へ着き、ここから吉井川を渡り、川



百札の地蔵



人形仙峠の母子地蔵

沿いに西岸を北上し、上齋原からは人形仙川を北上して人形仙峠から伯耆国穴鴨（三朝町）へと至るもので、『作陽誌』（元禄四（一六九二）刊）によれば八里五丁、つまり約三十一・七kmに及ぶ道程でした。

当時、街道には宿場町（宿駅）が置かれました。宿場町とは、旅人のための宿を提供したり、物資運送のための人馬の手配などを行う町で、人や物資が集まる場所としてにぎわいました。倉吉往来では、香々美中村新町・奥津・上齋原の三ヶ所に宿場町が置かれました。このうち、奥津と上齋原は従来存在した集落を宿場町として整備したのですが、香々美中村新町については、倉吉往来の整備に伴い、宿駅として村内に新たに設置されたもので、「新町」の地名はこのことに由来しています。津山城下町から奥津までは、かなりの距離がありますので、その間に宿駅が必要であったのでしょう。この新町が成立した年代は記録に残っていませんが、これまでの研究で寛永年間（一六二四～一六四五）には成立していたと考えられています。

また、百札は坂道で後ろから登る人が、前を行く人の太腿が見えるほど急であったため「ももだわ」の名がついたと『作陽誌』に書かれています。

るくらい、倉吉往来の中では最も難所で、『美作略史』（明治十四（一八八一）刊）によれば、元禄五年（一六九二）に、津山藩は茶屋を設置して、年間米三石の手当を出し、積雪等のため通行困難の者が利用する休憩所としました。現在でも峠から養野側に少し下った所に、茶屋跡の石垣らしきものが残り、峠には「御茶屋朝倉平右エ門」と刻まれた地蔵が建っています。また、人形仙峠にも同様に茶屋が置かれていました。これらの茶屋は、明治時代になっても明治十七年（一八八四）まで北條県・岡山県から手当が支給されたようです。

この倉吉往来は、江戸時代から明治時代前期頃まで津山―倉吉間の主要道路として利用されましたが、やがて馬車や人力車など交通手段の発達に伴い、急な峠を往来する道は避けられ、旧国道一七九号のルートが整備されると、百札や人形仙峠の道はほとんど利用されることもなくなりましたが、現在でも路傍には道標や石地蔵が残り、往時を偲びます。

参考資料：『新訂訳文作陽誌』、『奥津町史』、『因幡往来・因幡道・倉吉往来』、『美作の風土古道と宿場集落』、『枳形・日上山城と香々美村の暮らし』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733